

現代短歌分類辭典

第七十卷

津 端 亨 編 簒

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辭典

第七十卷

日本財団支援

笠川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

昭和五十七年十一月二十日発行 定価一、八〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端

亨

東京都台東区鳥越一一一一八

〒111

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端

亨

振替 東京 三一九三一一四番
電話 ○三(八五二)九八六九番

目

(第七十卷)

いけうとめきーて	いけーうづみ	異教徒	医芸くらぶ	いけーいけーて	いけーある	畏敬	いけーあり	いけーありーし	いけーある	池あと	埋け	活け	池
----------	--------	-----	-------	---------	-------	----	-------	---------	-------	-----	----	----	---

二三三九	三四四九	歌数
二三三五	三四四六	
二三三一	三四四二	
二三三七	三四四三	
二三三九	三四四九	

次

二〇〇	一九九	"	"	"	"	"	"	"	"	一九七	一九八	一九九	二〇〇
いけかふる	池川君	池川	生け方	生垣寄り	生垣外	生垣根方	生垣沿ひ	生垣越	生垣	池面	いけおきーし	いけおきーて	

一一四	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	二二四	二二二						
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

"	"	三七	"	"	"	"	"	"	"	三六	"	"	三〇一
---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	----	---	---	-----

いけかへーし
いけかへーて
池上
池上道
池上山
池上村
池岸
池際
池草
池口
池杭
池隈
いけーくれーし
いけーくれーぬ
いけーけり
いけごーし
いけこーし
目

一 一 一 三 二 一 六 三 一 一 一 六 五 一
六

三 四 “ ” 三 “ ” 三 三 “ ” 三 八 “ ” 三 七

池鯉 池木立 池越し
いけさか
いけさせ
いけさせーし
いけさせーぬ
いけさせーて
いけーし
いけーさりーし
いけーさりーぬ
埋けし
いけじき
いけじ
いけしま
いけしめ
いけしめーし
池島

一 二 一 二 一 三 二 三 一 一 一 二 三 一 一 一

三 五 “ ” 三 五 “ ” 三 五 “ ” 三 五 “ ” 三 五

いけーしめーて
いけーしめーぬ

池田（四国）

池尻
池尻村
生簾・生洲

生けーす
いけーすゑーて

二一三一三
二五

池田潔
池田湖
池田駅
池田貞光
いけーたてまつる

池田勝入
池田氏

池田雀

池田炭

池田内閣
いけだーのーあそ

池田の里

池田の湖

池田の町

池田勇人

池田
池田（北海道）
いけーた

二一三一三
二五

二一三一三一三
二五

池田人
 池田益吉
 池田町屋
 池田山
 いけーたまふ
 いけーたり
 いけーたりーし
 いけーたる
 いけーたるーならむ
 いけーたるーは
 いけーたれーば
 いけーつ
 いけづき
 いけーつ
 いけーつぶち
 いけーて
 埋けーて

一五七一四一ニ四ニ一三九一三四一一一

二七〇二五七二六二二五二二五二二九二

生捕り	池どり	いけどりーし	いけどりーて	いけない（終止形）	いけない（連体形）	いけないーと	いけないーん	いけーなやむ	いけーに	いけーに	いけーにーけむ	いけーにーけり	生けーにーける
池殿	池寺	池どり	池どり	池波	池中	池中	池波	いけーたるーは	いけーたれーば	いけーつぶち	いけづき	いけーつ	いけーつ

一九一一一三二二四二一一一三二

二七〇二七一二七二二七三二七三二七三二七一

活けーにーし
いけにへもの
いけーぬ
池主
いけぬち
いけーのーかがみ

三一一一九一四二一三一一二一七二一

二二二二八三二二八二二八二二八〇二二九二二七

生剥
いけーばや
池端
いけひ（池氷）
活花・生花
いけーひち（泥泥）
池ばん
いけーほとり
池辺
いけーまく
池袋駅
いけーましーにーき
いけます
池ぼし
いけーまく
池べり
いけーまく
池の湯
いけーば
池の女神
いけーば
池の端町
いけーば
池の主
いけーば
池の大雅
いけーば
池の越
いけーば
池の平
いけーば
池の端
いけーば
池庭
いけにへもの
いけーぬ
池主
いけぬち
いけーのーかがみ

一一三一一三二二三四一一一九二一

二二二二五二二二八二二二二二二二二七二二八四

いけーまつりーたる
 池水
 いけーむ
 いけむかひ
 いけむろ
 池面
 池守り
 池山の町
 いけよーかし
 いけよーゆきーし
 いけーらく
 いけーらーば
 いけーらむーや
 いけーられーし
 いけーられーて

九一ーー五四一ーーーー一九一一六七一

" 三九 " " 三八 " " 三四 " " 三三 " " 三二〇 " " 二九二

生ける	いけーられーにけり
合計	いけーられーぬ
四二三五首	いけーりー
	生けーりーけり
	生けーりーける
	いけーりーし
	いけーりーと
	いけーりーとーしも
	いけーりーとーぞ
	いけーりーとも
	いけーりーとーもーなき
	いけーりーとーもーなく
	いけーりーとーもーなし
	いけーりーよ

三三一 一 二 七 二 五 五 二 一 一〇 四 一 一 三 二 一

三三六 " 三三五 " 三三四 " 三三三 " 三三二 " 三三一 " 三三〇 "

いけ【池】（名詞）

地を堀りて水をたたへたる所

あかあかと朝日さしゐて池の蓮みながら秋の風ならぬなき

赤き池にひとりぼつちの真裸のをんな亡者の泣きゐるところ①

赤き黄色きボート整ふ池のあたりうるほふかげは春となりたり②

暁に山ゆきかひし白雲のしづくばかりの小き池かな（心の遠景）

あかときの池の面しづか睡蓮のひらききるまを待ちて吾が居り③

暁の池は氷にとぢられてをし鳥二つ岩の上にあり④

あかつきのたづのなくねに夢さめて池のほとりをおもひうかぶる

暁も耕平も居き桜咲きて昼をつどひし池のべの家⑤

赤鳥居池に映れり佐用姫は祀られずして稻荷のほこら⑥

茜雲やややに冷え映るうぶすなの池の面ひとと鯉はうかび来（多磨四）

いけ

若山牧水

斎藤茂吉

上代皓三

与謝野晶子

高橋英子

正岡子規

牧野伸顕

鈴江幸太郎

川田順

小林正孝

いけ

上りたる成績ほめつつ日向辺に散髪し居れば陽を返す池(一)
あかるくし耀へりける春の池や白鳥はゆたに水うごかしぬ(一)
明るくも春の日かけのさすところ池の古水いたくよごれぬ(一)

秋霞はれゆくなべに群青の池に楓の葉を散らしたる(①)

あき風に池のはちち葉かたよりてさやかにうつる月のかげかな(一)

秋風のさそふこの葉にさきだちて浮びそめたる池の水島(一)

秋霧をかすかに吸へり山上の八幡の池の睡蓮のはな(那須野)
あきくれてやなぎ織なる銀いろの葉をおとしゆく池の面へ(一)

秋雨に濁れる池の水の面にちりてさやけき萩のしら花

秋澄みて散りのこりたる花蓮とよみはつたふ広き池の上(②)(現代短歌全集)

秋立つや池の水鏡の片よりに白はちすのみ咲きて風吹く

秋の雨ふる池の面に相聚れり無数のをさな真鯉の群は(②)

田	若	吉	高	鈴	与謝	明	高	坂	野
谷	山	田	監	鹿	野	治	橋	井	村
				俊			俊		
牧	正	背	晶	子		天	人	菊	清
銳	俊	山	子			皇		紀	枝

秋の池枯れし水草みずくさのさび果てぬかすかに鳴れる水よ何処に⑯
秋の空に雲おほくなりて池の魚影にしばしばおどろきて散る⑮
秋の庭一葉とどめず水光る彼方の池に人の手洗ふ⑯

秋の日の池のおもてのうすぐもりおもむろにして鯉の行きけり

秋の日の終りにきたりこの池に沈む無患樹むげじゅの実を一つ見ず

秋晴るるこの原なかの小さき池子らはひそかに來り泳げり①

秋めきし夜雲がもとの暗き池かはづの鳴くはすでに稀なり③

秋もやや更けにけらしな水鳥のかげみえそめる山かげの池③

秋山のはざまに噴きて温泉の澄みたたへたる池は見飽かぬ

明らけき今宵の月夜奥の池に降りゐる鷺の空の鷺を呼ぶ⑪

明らけき月夜とならむ池の面ひと村雨はすぎゆきにけり② (現代短歌全集)

秋を三人椎の実なげし鯉やいづこ池の朝かぜ手と手つめたき (みだれ髪)

いけ

窪田空穂	中村憲吉	窪田空穂	中村憲吉
清 水 比庵	飯 田 莫 哀	古 泉 千 樞	中 村 憲 吉
樋 口 一葉	桶 口 一葉	中 島 哀 浪	吉 植 庄 亮
吉 植 庄 亮	水 町 京 子	晶 子	与謝野晶子

いけ

明くる間も暮るるも降れる雨水は庭を池ともなし果にけり⑨

あけがたの松のあらしにたちにけむすくなくなりぬ池の水とり一

あけがたを霧降る池に水の音をりをりするは鯉はぬるなり一

朱古りじ堂のひそけさみまもりて心疲れければ池にそひて歩む④

朝あけて池のみぎはに飛びくだる鶴の羽ばたき大きくなるか⑪

朝光に金魚浮べり池のぐるり菖蒲は白き花をひらきて一

朝かげに榛の若葉する古き池いづみ涸れて鴨のみなくなりたり一

朝光はのびゆきて氷に触りしかば池輝きて前方にみゆ①

朝風にすがしと思ふ雛鶴の鳴く声やさし池の辺にして⑤

朝かぜに露ちる池のはちす葉は花におとらずゆかしかりけり②

あさかりにたつ人多しころして池にはかへれ小田のみづとり

浅草に来ておどおどとする妻は池に来て池をきたなしと去る

(新
別
萬
葉)

尾	山	篤	一郎	昭	憲	皇	太	后
山	口	不	二花	松	田	常	憲	
斎	藤	茂	吉	金	子	信	三郎	
上	代	皓	三	今	井	邦	子	
山	崎	一	郎	樋	口	一	葉	前
山	一	郎		繁	利			遠
夫								

浅草の池の緋鯉に鉄を投げて秋の一日を悲しみにけり①（現代短歌大系）

和田山蘭

朝ごとに数こそまされふせあみのうきめをしらぬ池の水鳥①

昭憲皇太后

朝毎に睡蓮の花池に咲く水に浮きたる花いとほしむ④

久保田不二子

朝氷まだうすければ水底の落葉もみゆる池のおもかな①

明治天皇

朝闌くるま夏青空日をふらす池水面に光は躍る⑧

高田浪吉

朝づく日さすかたにのみうかぶなりなかばこぼれ池の水鳥①

明治天皇

朝づく日にほふ堤にねぶりけり夜たださわぎしいけの水鳥②

明治天皇

朝づくよほのぼの残る池のおもにさくやはちすの音のさやけさ①

明治天皇

朝戸くれば池の金魚のきらきらとみな浮びをりて眼の下に泳ぐ⑫

明治天皇

朝な朝な草刈鎌を研ぎ浸す池の岸べの藤なみの花

明治天皇

朝の雨ふる池に透きくらぐらとめぐる鯉のなか白き鯉もをり②

明治天皇

朝の池に白き水鳥下りてゐて水照りしづかにひろげつつ居り

明治天皇

いけ

いけ

朝の池に靄立つひさし松原のうぐひすの声は啼きてととのふ④
朝はやき池にポートを漕ぐみれば彼岸の幸福のひとつのごとし③
朝日かげうつりそめたる方にのみ波はありとも見ゆるいけかな①
朝日かげさし来て池の水鳥は沾羽ほすらし岸にのぼりぬ（朝雲）
朝日かげさしわたれどもはりつめし池の氷はうは解けもせず②
朝日さすいけの氷のとけそめて水の煙もかすみけるかな①
麻漬すかど辺の泮は水きよし妹子にあはまくもよし⑨
朝日照る池の水鳥羽ばたきてひく立つ時水を払へり（朝雲）
麻漬す山辺の泮は水きよしうす陽のかげにてれる浮藻葉⑩
浅間山雪の一夜は明けむとし湯宿の池に家鴨鳴きつぐ④
浅水の澄みて湛ふる林泉の池岩間の木賊梢枯れそめぬ③
あさみどりはすの葉うらもかつ見えて朝風わたるおほまへの池①

○新年御
歌会始

中 村 憲 吉	鹿児島 寿 藏	下 田 歌 子	岡 昭 憲 皇 太 后	明 治 天 皇	鹿児島 寿 藏	下 田 歌 子	岡 昭 憲 皇 太 后	明 治 天 皇	鹿児島 寿 藏	下 田 歌 子	岡 昭 憲 皇 太 后	明 治 天 皇	鹿児島 寿 藏	下 田 歌 子	岡 昭 憲 皇 太 后	明 治 天 皇	鹿児島 寿 藏	下 田 歌 子	岡 昭 憲 皇 太 后	明 治 天 皇
井 上 通 泰	広 野 三 郎	奥 貢 信 盈	安 江 不 空	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江	岡 安 江

朝靄に白蓮の池おぼろなり露の壁のみほの光りつつ（碧潮）

朝靄の匂ひただよふ池のべを水鷄の雛の二つ居り見ゆ

朝夕にひとり眺めぬ秋萩のうれながくさを池にうつるを③

朝ゆふの池になづさふ靄の氣の岸の冬木に上ることのごろ③

足音に驚きにけむ池の鯉あぐるにごりの水の面にひろがる（秋風抄）

足音に寄り来る池のさまざまの鯉の頭は撫でてやりたし⑤

葦かびのすでに崩ゆらむ庭の池の沖べにありて鴨のなくなる②

あした見なば濁れる池の水すらに夜なれば清く星うつりたり

葦の若葉茂らふ池も江戸の名残にて淡き夕影によしきりのこと①

芦はみなしもがれふして水鳥のかずあらはにもみゆる池かな①

葦原のひかりしづまる夕まぐれ鳴来てかづく家の前の池①

足冷えて心ともしき夕ぐれの池の面にそぞぐ雨かも

いけ

岡崎義恵

古泉千櫻

久保田不二子

中村憲吉

松田常憲

中原綾子

栗原潔子

原阿佐緒

金子信三郎

明治天皇

堀内通孝

鈴木誠一

いけ

あしひの花盛りとなりし庭の池冬を越えたる小魚むれよる④

葦細く池を覆ひて茂れれば太き短き小なぎひとちら一群②

遊び所もなき村と言ふ友につきて鯉飼ふ池を夕べ見にゆく②

遊びゐし池の蓮葉笠にしてかけくる児らの夕立の雨①

あたたかう春立ち来れば池の水うすらに雲をうつしゐにけり①

あたらしき時間に触れしごとくにも新涼の庭の池の端に来つ(多磨一)

あたらしきゆかた姿に妹はなりて池の蓮の花かぞへ見る

あたらしく葭そだてむと岸よりに池を区切りて杭打ちてあり⑧

紫陽花の花咲くかけに雨多き日本の池濁りを湛ふ⑧

厚き氷のうへににじみて光るまで寒明けのちの池に和^アぐ日よ③

暑き日の暮れて風立つ池の面清しむごとく跳ねる鯉あり八(毎日歌壇)

厚氷とぢたる池の底までもてりとほるかとみゆる月かな①

久保田 不二子

斎藤喜博

相良義重

武島羽衣

米倉久子

平沢進八郎

前田林外

宮格二

宮格二

生方たつゑ

香取

明治天皇

久保田 不二子